



ものさし



にし はる

ハート王国にも冬が近づいてきました。

ある日、森の中で、くまのゴンゴはエサをさがしていました。

もうすぐ冬みんするゴンゴは、エサをたくさん食べておかなければいけません。

でも、エサはなかなか見つかりませんでした。

ゴンゴは、グーグーなるおなかをおさえて、森の木によりかかりました。

「はあ、おいしいものをおなかいっぱい食べたいなあ。

はちみつたっぷりのパンケーキとか、まるまるふとったねずみとか。」

と、そのとき、ねずみのチュータが通りかかったのです。

「ガオー！食べちゃうぞ！」

ゴンゴは、すぐにチュータをつかまえました。

チュータはなみだをながして、ゴンゴの手の中で言いました。

「おねがい、ぼくを食べないで！

かわりに、なにかおいしいものをもってくるから！」

「なにかおいしいものだって？

まるまるふとったおまえのかわりになる、おいしいものってなんだ。」

「たとえば、はちみつたっぷりのパンケーキとか...。」

「ほお。そうだな、ちょうど食べたいと思っていたんだ。

よし、パンケーキを持ってこい。

でも、あつさが10センチのパンケーキじゃなければだめだ。

1センチでも足りなかったら、おまえを食べるからな。」

ゴンゴはそう言って、チュータをはなしました。

チュータは家へとんで帰って、さっそく、あつさ10センチのパンケーキをやき、ゴンゴのところへ持ってきました。

「よし、やいてきたな。

どれどれ、おいらのものさしで、あつさをはかってやる。

1センチでもたりなかったら、おまえを食べるやくそくだからな。」

ゴンゴはそう言って、ものさしでパンケーキのあつさをはかりました。

「ん？おまえ、ふざけているのか？

5センチしかないじゃないか！」

「え！」

チュータはまっさおになりました。

「そんなはずないよ。ちゃんとぼくのものさしではかって作ったんだから！」

チュータも、ものさしを出してはかってみると、ちゃんと10センチありました。

「ほら！10センチだよ！」

「うーん」

ゴンゴはうめき声をあげました。

そこに、ハート王国の王様が通りかかりました。

「どうしたんじゃ、ふたりとも。こまったかおをして。」

ゴンゴとチュータは、今までのことを王様に話しました。

すると、王様は言いました。

「ふむふむ、そういうわけか。

どれ、ふたりのものさしを見せてごらん。」

王様はそう言うと、ふたりからものさしをうけとって、ながめました。そして、

「なるほど、なるほど。

これは、ふたりのものさしのちがいじゃな。」

と言いました。

「ものさしのちがい？」

「そうじゃよ。ふたりのものさしを、ならべておいてごらん。」

ゴンゴとチュータは、王様に言われたとおりにしてみました。すると、

「あ！」

ふたりは目をまんまるくしました。

ふたりのものさしの1めもりは、おなじ1センチでも、大きさがちがっていたのです。

王様は言いました。

「つまり、1“くま”センチと、1“ねずみ”センチのちがいじゃな。」

すると、ゴンゴは言いました。

「1“くま”センチが正しいに決まっている。」

「おいらのものさしをきほんにして、かんがえてくれよ。」

すると、チュータも言いました。

「そんなこと言っても、ねずみの世界ではこれがきほんなんだ。」

「まあまあ、ふたりとも、ちょっとまってごらん。」

そう言うと、王様は、つれてきていたけらいに何かめいれいしました。

しばらくすると、けらいが、ぶあついパンケーキをやいて持ってきました。

「さあ、これが10“くま”センチのパンケーキじゃよ。」

ゴンゴがじぶんのものさしではかってみると、たしかに10“くま”センチでした。

「さあ、ふたりとも、チュータがやいてきた10“ねずみ”センチのパンケーキと、この10“くま”センチのパンケーキを、食べくらべてみてごらん。」

ふたりは、王様の言うとおりに、まず10“ねずみ”センチのパンケーキをひとくち食べてみました。

チュータは言いました。

「おいしい！これぞ、ねずみのパンケーキだ。おいしさがギュッとつまっているよ。」

ゴンゴも言いました。

「フン。これはこれでうまいな。たしかに、あじがギュッとつまっている。」

つぎにふたりは、10“くま”センチのパンケーキをひとくち食べてみました。

ゴンゴは言いました。

「うまい！これぞ、くまのパンケーキだ。どうだ、フワフワでうまいだろう。」

チュータも言いました。

「おいしい！こんなフワフワなパンケーキ、はじめて食べたよ。」

王様はふたりにききました。

「どちらのパンケーキがおいしかったかね？」

チュータは言いました。

「うーん。どっちも、それぞれおいしかったです、王様。」

ゴンゴも言いました。

「...たしかに、どっちにも、それぞれのおいしさがありました、王様。」

王様は言いました。

「そうじゃろう。

だから、どちらのものさしが正しいということはないんじゃないよ。

どちらのよさもみとめあいながら、たのしく、はかりあっこすればいいのじゃ。」

ゴンゴはうなずいて言いました。

「そのとおりですね、王様。

くまにはくまの、ねずみにはねずみのものさしがあるって、はじめて知りました。

どちらにも、それぞれのよさがあるんですね。」

王様は

「そうじゃ、そうじゃ。」

と、ほほえみました。

ゴンゴはチュータに言いました。

「チュータ、おいしいパンケーキをありがとう。

これをおなかいっぱい食べて、おいら、冬みんすることにするよ。」

チュータもゴンゴに言いました。

「ゴンゴ、こちらこそ、ぼくを食べずにいてくれて、ありがとう。

また来年の春に会おうね。」

王様はうれしそうにわらいました。

「ホッホッホッ。よかった、よかった。」

ハート王国に、心がホカホカの冬がおとずれようとしていました。